

## 新入社員のみなさんへ

仕事を面白くするには  
大阪女子短期大学教授

井上宏

### 一・うれしさ半分、不安半分の新入社員

新入社員は、「美しい桜の下、希望に胸を膨らませて入社する」というのが通り相場だ。しかし本当のところ、新入社員の胸の内は一樣ではない。

新入社員といっても、厳しい就職状況の中、希望の叶えられなかった人、自分が何をしたいか分からないまま、とりあえず企業に潜り込んだ人、思わぬ配属部署にとまどっている人などいろいろだ。大部分の新入社員は、期待と共に何らかの不安や不満を抱いているのが現実だ。

今、自信満々の人も一年も経てば壁にぶつかる。社

会経済生産性本部が毎年行っている新入社員調査でも、半年間の間に随分と意識の変化が見られる。

世界的な大競争に打ち勝つため、企業は、能力主義、成果主義、エリート選抜などを声高に叫んでいるが、勝ち残れる人はほんの一握りに過ぎない。新入社員はそれを敏感に感じている。

そんな、不安もいっぱいのごく普通の新入社員が、どのような心構えで、どのような働き方をすれば仕事を面白いものとすることができるかについて、私の思いを伝えたい。

### 二・何のために働くのか

就職活動のときにも考えたことだろう。入社後も、壁にぶつかったときなどに改めて思うのは、何故、何のために働かねばならないのかということだ。

昔はこんな疑問を感じることは余りなかった。働か

なければ食べられず、また、人として当然のつとめとされた。しかし、現代は働かなくてもパラサイトを決め込むこともできるし、社会規範も揺らいできた。「なげ人を殺してはいけないうか」さえ問われる時代だ。会社生活の節々でこの疑問が頭をもたげてくることになる。

過去の新入社員たちはどう考えていたか。社会経済生産性本部の調査によると、平成十二年は、一位「経済的に豊かな生活を送りたい」二十九・六%、二位「自分の能力をためす生き方をしたい」二十六・六%、三位「楽しい生活をしたたい」二十六・一%となっている。

「社会のために役立ちたい」や「企業の発展につくしたい」はそれぞれ五・九%、〇・五%しかない。しかし、ここ数年は「自分の能力をためす生き方をしたい」と

答える人がトップを占めてきた。

これを平成十年の世界青年意識調査で見ると、どの国でも「収入を得るため」というのが一番多いが、日本を含めた東アジアでは、「仕事を通じて自分をいかすこと」とする率が、西欧諸国と比較して多かった。みなさんは今、どう考えているだろうか。

### 自己実現ということ

最近、働く目的として自己実現のため」ということが盛んに言われるようになった。前述の調査結果にも、その影響が表れている。

私は、その言葉に対する誤解が、新入社員が仕事に不満を覚える原因の一つになっていると考えている。自己実現の意味を「自分の好きなことをする」「自分の潜在能力を發揮することと解釈している人が多い。自己実現をこう捉えて

いると、仕事に不満も多くなり、壁にぶつかったとき、すぐに挫折し、もつと面白い仕事があるのではないかと、他に自分の能力が生かせる場所があるのでないかと、考えることにつながる。

というのは、会社の仕事は一見して面白い仕事ばかりで成り立っているものではないし、誰もが人に優れた才能を内に秘めているものでもない。平凡な才能の人たちが、一見面白くもない仕事に懸命に取り組んでいるのが、この世の中の現実なのだ。

### どんな仕事も面白い

「一見面白くもない」という言葉には意味がある。端から見て面白くなさそうに見えても、本当は、どんな仕事にも面白さがある。仕事の面白さや、やりがいは実際にその仕事にのめり込んでみなければ分からない。新入社員の中には、そ

れが分かる前に、挫折してしまふ人がいる。

働く目的は自明のもので

はなくなつたが、どんなときに、面白さ・やりがいを感じるかについては、どうやら、遣伝子に刷り込まれた法則があるらしい。つまり、壁にぶつかつて、それを乗り越えたとき、自分の創意・工夫が実つたとき、

自分の仕事組織や他の人の役に立っていると実感できたとき、自分の仕事が終わりに引き継がれ、拡大していくとき、どんな仕事でも、人は達成感・自己の拡大感を得ることができ、好き嫌いを越えたやりがいと面白さを感じるようだ。それは必ずしも、他からの評価や報酬の如何も問わない。またそれは、普通の才能の人でも持つことが可能な感覚だ。

逆に言えば、困難を避ける人、工夫をしない人、

他の役に立とうとしない人がやりがいを得ることは難しい。

また、「本当の自分」をいつもどこかに探し求めている人は、いつまで経つても見つけることができない。本当の自分は、探すものではなく、今ある自分を土台に作り上げていくしかないからだ。

あるのか無いのか分からない潜在能力をいつまでも探すよりは、今必要とされる能力を磨くことで自分の顕在能力を作っていくべきだ。

つまり、「本当の自分」とか、「潜在能力」を夢想せず、自分の仕事は「周りの人の役に立っているか」「社会の役に立っているか」を念頭に置きながら、現実と格闘する中からこそ、自分なりの自己実現が生まれてくるものだ。

### 三・新入社員の働き方

働く意味・心構えについて考えてきたが、では、新入社員は働き方をどうすればよいのかについて考えてみよう。

#### 人間関係作り

新入社員が職場に入つて、まず心配なことは職場にトけ込むことができるかどうかだろう。学校と異なり、職場はいろいろな世代の人たちで構成されている。ところが、最近の若い人たちは違つた世代の人たちとの付き合い方に慣れていない。

同期とは付き合い合つても先輩との間には壁を作つてしまふ人が多い。先輩との付き合い合いのチャンスは逃さず、職場の知識を積極的に吸収するよう心がけたい。

直属の上司やOJTのトレーナーとの間がうまく行かないと感じた場合でも、自分の方が原因を作つていないか、相手の人間性を理解しようとしていたかを、

まず謙虚に反省してみよう。それでも、どうしても上司との間がうまく行かないので会社を辞めたいという相談を受けることがある。

しかし、そんなことで辞める必要はないといつても言っている。会社というものは異動・転勤が付き物だ。いつ上司が異動するか、自分が異動するか分からない。

いずれ時間が解決するのだから、その間ちよつと変わった人間の勉強をさせてもらつているのだと割り切れれば良い。そう気持ちを楽に持つたら、意外とうまく行きだしたということだつてある。

#### 基本を身につける

仕事の基本をしっかりと身につけることが大切だ。何が基本かは仕事によつて違つてくるが、例えば絵画の場合では、線と色彩と濃淡を扱う技術をしっかりと身につけることだ。どんなに優

れた感性の持ち主でも、基本的な技術がなければ良い絵を描くことはできない。

特殊メイクアップアーティスト江川悦子さんの出てくるテレビコマーシャルを見る人も多いと思う。単身ハリウッドに乗り込み、ゴーストバスターズの特珠メイクアップで一躍名を上げた人だが、「今でも一番大切にしているのは基本かな。しっかりと技術があつてこそ、自由な発想とか表現力が生きると思うんですよ」と言っている。この面

でも、先輩から教わることも多いはずだ。

#### 日常の仕事を大切に

次に、つまらないと思うような、こまごました仕事もしつかりやるのが大切だ。最近の若い人は、テレビの影響か、すぐに大きな仕事をしたがる。しかし、会社の仕事というのは、こまごました日常の仕事の上

に築かれており、それが大きな結果に結びつき、また、他の部署の仕事に影響を及ぼしていることを知るべきだ。十八世紀ドイツの劇作家シラーは「簡単なことを完璧にやる忍耐力の持ち主だけが、いつも困難なことを軽々とこなす熟練を身につける」と言っている。今も通用する格言だ。

### 創造力の身につけ方

さらに、IT革命・メガコンペティションの時代、創造力の発揮こそが若者に最も求められていることだ。会社にとっても必要なことだが、自分自身にとっても創意工夫が実ったときほど働きがいの感じられるときは少ない。

創造力の養成については、いろいろな人が様々なことを言っているが、私は二つのことを言っておきたい。一つは、知識・経験の幅を広くすることだ。自分の専

門に関係のないようなことでも、どんな欲に勉強してほしい。人間の考えは、所詮は自分の知識と経験から組み立てられるものだから、知識・経験の乏しい人は創造力も乏しいのが道理だ。既知の知識・経験の意外な関係を見つけることから、全く新しいものが生まれることがある。

今一つは、前提を疑うことだ。会社の仕事はいろいろな前提条件の上に組み立てられている。賢い人たちの考えたことだから、前提条件が同じであれば大抵同じ結論に到達する。ところが、前提条件が変わっていることに気づかないことがあるし、気づいていても、忙しさにかまけて、ついそのままになっていることがある。若い人たちは、常に先輩が当然と考えている前提を吟味し、変わっていることに気づけば、新しい前

提の上に組み立て直した提案をすべきだろう。当然今までのシステムの破壊を伴い、抵抗もあるし、一人の力では不可能だから周囲を説得する技術も必要となる。

### 組織に埋没しない

最後に言いたいのは、組織の一員としての役割を果たしながら、組織に埋没しない姿勢が必要だということ。会社という組織は利益をあげるためにある。効率で全てが測られる組織の中にあつて、地球市民の感覚を持つことは難しい面もあるが、忘れてほしくない。

ところで、新入社員も無我夢中の一年が経ち、仕事に慣れてくると、職場や仕事に対する不満が出てくる。会社の悪い点もどんどん耳に入るし、学生時代の友人が活躍している様子を聞くにつけ、自分の生活が惨めに思えてきたりする。しかし、この壁を創意工夫で乗

り越えよう。きっと、本当の仕事の面白さが見えてくる。

新入社員は、よく勉強し、しっかりと考える癖を付け、しかも立ちすくむことなく、未来に向かって行動する勇氣と粘り強さを持つてほしい。(完)

(経歴)一九三九年生まれ、大阪大学経済学部卒、ユニチカ株式会社を経て、一九九五年から大阪女子短期大学児童教育科勤務